

言葉を科学する：人間の再発見

Day 12 ちょっとだけ feedback

・Q：文章の中で、おそらく赤ん坊を対象にして実験が行われていたが、そのような実験が赤ん坊の言語習得になんらかの影響を及ぼす可能性があるのではないかと感じた。

***これは、とても重要な問題です。幼児や幼い子供を対象に「実験」をすることに、倫理的問題はないのでしょうか。授業で少し考えてみましょう。**

・Q：マサチューセッツ工科大学に「言語哲学科」があると聞いて驚きました。

***哲学は全ての学問研究の中核です。欧米の university には必ず哲学科があります。もともと philosophy は、ニュートンの頃までは、学問全般を指していたと思います。science という単語は新しい。この研究は、何を明らかにすることを目指すものなのか、どのような方法論が適切なのか、学問全体の中での位置づけはどのようなものなのか、どうなれば理解が少し進んだと判断できるのか、などなど「哲学的なこと」をきちんとおさえておかなければ、科学的な研究はできないのではないかと考えられます。明治維新後に富国強兵を目指して輸入された側面が強い西洋科学なので、日本では実学的な側面が強く、このような哲学的な側面がまだ未熟なのかもしれませんね。**

・Q：日本語で「あなたは優しいが仕事ができない」とマイナスのイメージが強く、「あなたは仕事ができないが、優しい」というとプラスのイメージが強く聞こえる気がするが、このような語順の違いによる伝わり方の変化は、他の言語にもあるのだろうか？

***面白いポイントです。子供に対する実験からも、人間は文の最後に出てくる要素により注目するという特徴があるようです。英語でも、I gave the book to the boy は、the boy がより重要、I gave the boy the book では、the book がより重要、と解釈される傾向があります。**

・Q：音と意味を結びつけるとあるが、聴覚障害者は、この能力に遅れを生じさせないのか。宿題にあった本では、彼らはハンディを持たず、健常者と会話できるとあったが、計算の過程はどこでおこなわれているのか。

***I 言語は頭の中にあるシステム・能力ですね。それを表に出す方法として、健常者であれば音声をつかい、聴覚障害者であれば、サイン（手話）を使うという違いがあるだけです。したがって、聴覚障害者の場合はサインと意味とを結びつけるということです。音声言語で健常者と同じように会話することは難しいかもしれませんが、健常者が手話言語を身に付けば、何の問題もなく会話はできます。両親が聴覚障害者で、自分は健常者である子供は、手話言語（両親との会話）と音声言語（幼稚園や学校など家の外の世界での言語）のバイリンガルになることが多いようです。**

・Q：「世界」という言葉が授業中に何度か出てきますが、「世界」というものの概念をまず明らかにしないと、「世界の仕組みを明らかにする」とは何を目的としているのか分からない気がしました。

*** 良い質問ですね。人間も含めて地球上の生物やもの、宇宙全体、全てここでいう「世界」です。1つの科学分野でそのような世界の側面の全てを研究することはできませんから、それぞれ何を対象とするかである程度分野が決まってくる（研究をする前からその分野が明確に区別できているわけではありません）。素粒子物理学はそのような「世界」のうちの「素粒子物理的な側面」を明らかにする研究、光学はそのような世界のうちの「光学的な側面」を明らかにする研究、その意味で、人間の頭の中にある言語能力というシステムも「世界」を構成しているある一面ですから、それを明らかにすることは、世界の仕組みの中の「I 言語的側面」を明らかにする研究と言えるでしょう。**

・Q: よくある「いやみ」や「皮肉」（遅れてきた学生に「ずいぶん早いね」など）の意味の理解は、どのような言語能力によるものなのでしょうか？社会経験などを積むことで理解できていくのでしょうか？

*** 良い質問ですね。これは、実際の言語運用にかかわる研究で言語学の中でも「語用論 pragmatics」と呼ばれる分野に入る内容だと思います。この授業の最終回で少し触れます。**

・Q: ほかの動物も鳴き声や超音波などで相手と意思疎通を図りますが、この鳴き声はこういう合図、というのは類推するまでもなく本能としてもう身についているのですか？それとも人間と同じように学習していくのですか？

*** 興味深い問題です。種が同じであれば、かなりの程度本能である可能性が高いようですが、同じ種類の鳥でも、地域による「方言差」がある場合もあるということが研究によって明らかになっているようです。興味のある人は、岡ノ谷一夫氏の一連の鳥の鳴き声の研究を見るとよいでしょう。**

・Q: 時々でてくる「言語獲得」という言葉に不思議さを感じます。「言語習得」とは言わないのでしょうか？

*** このタイプの言語学では、言語獲得（language acquisition）と言語習得（language learning）とを意識的に区別しています。後者は、意識的な努力によって行われるもの（外国語学習など）、前者は生得的能力に導かれて自然に、無意識のうちに身に付く能力と考えています。しがたって、母語に関しては言語獲得といういい方が正確である、ということになります。**

<以下、質問ではありませんが、宿題に対して、とてもよいコメントがたくさんあったので、いくつか紹介します>

・ウォーフは言語に関してあまり冷静な分析ができなかったのだと思う。彼はきちんと実験もせずに、サピアの講義を聞いて得た知識をもとに自分の考えを追及してしまったために、極端な意見を持ったのだろう。自分の考えを持つのは素晴らしいことだし、誰しも自分の考えが今までになかった画期的なものだと思いたいものだ。しかし、考えた仮説を偏りのない方法で実験し、冷静に考察しなければ、科学としての側面を持つ言語学についての根拠を持つことはできない。もしウォーフが実験によって、その考えを少しでも実証しているなら、

他の研究者たちもこれほど否定ばかりしなかつただろう。

ウォーフが批判される理由からは、言語を科学的に思考するのに重要な条件を知ることができると思う。用いるサンプルはできるだけ多くし、研究対象に直接会い、外国語にこじつけめいた訳をつけない、一つの考えに傾倒しない。ウォーフは言語学にとって重要な発見はしていないが、後の世代の研究者たちが彼と同じような考えに至ることを阻止したと言えるかもしれない。

・今回は、研究者の興味や偏見によって研究結果が左右されうる例を学んだ。客観的事実を追究するときに、こうだったら面白いとかこうに違いないという考えは、先入観ではなくあくまで仮説にとどめておかねばならないと思う。また、言語学における対照実験は、実験する側の両言語についての理解が十分に深くないと成立しないことも実感した。